

いつか運動会やりたい

アフリカで延べ1万本以上の義足や義手を作ってきた日本人女性の活動が窮地にある。でも、活動を止めることはない。これまでも困難を乗り越えてきたのだから。

1994年に大虐殺が起きたアフリカ中部のルワンダで、手足を奪われた人たちのために20年以上も義足や義手などを無償で提供し続けてきた日本人女性がいる。神奈川県茅ヶ崎市出身のルダシングワ真美さん(57)だ。これまでたくさんの困難に直面してきたというが、この1年は特に試練が続いている。洪水の被害や政府による義肢製作所の強制撤去。再建資金を集めるた

めの講演活動も、新型コロナウイルスの影響で次々に中止となった。それでも「必ずや復活するので見ていてください」と笑顔で話しているのは何か――。

真美さんは、日本で働いていた89年に、「単調な生活から逃

れた」というが、この1年は特に試練が続いている。洪水の被害や政府による義肢製作所の強制撤去。再建資金を集めるた

わたった足償る美地育
にで義無いて真現も
ルワンダを続けワ土
20年以上義手な続シ(中央)義肢装具士成
てや提供ルさんで義肢装具士成

夫と義肢製作所を開設

真美さんが義肢づくりを学んだのは、右足が不自由になったガテラさんの装具を自分で作りたいと思ったことがきっかけだ。92年から約5年間、日本の義肢製作所で修業を積み、ガテラさんとともにNGO(非政府組織)「ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」を設立。97年にルワンダに義肢製作所を開いた。

ルワンダは、植民地支配によって民族が憎み合う構造がつけられ、94年の虐殺の際には100万人ともいわれる犠牲者が出た。ガテラさんは国外に逃れて無事だった。だが、1年後にル

ワンダを訪れた真美さんの目に映ったのは、鉈や斧で切り落とされたり、手榴弾で吹き飛ばされたりして手足を失った人が町中にあふれる様子だった。義肢や装具の必要性を強く感じたという。

プロジェクト名につけた「ワ

ンラブ」は2人の大好きなミュージシャン、ボブ・マーリーの曲にちなんだものだ。ワンラブのホームページには「分けられってしまった国民が争うことによつて、多くの血が流されました。そんな悲劇が2度と起こらないように願いを込めて、私たちは『ワンラブ』ひとつになつて愛し合おう」と言う名前を付けました」と書かれている。

日本に帰った真美さんは、約300カ所ある義肢製作所すべてに手書きの手紙を送り、使わなくなった義足を提供してもらいうような協力を求めた。資金集めにも奔走した。

ルワンダで義肢製作所を開くと、評判を聞きつけた人たちが

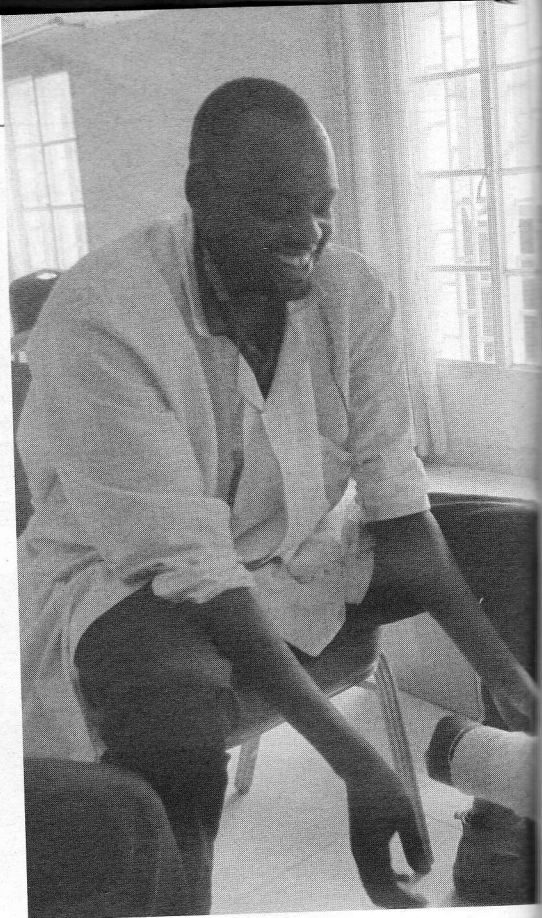
次々に訪れた。だが、日本で修業していたときとは違い、ルワンダでは材料も手に入りにくい。真美さんたちはある材料で工夫して義足を作り続けた。そうして現在までにルワンダで延べ8千人以上、隣国ブルンジで延べ3千人以上に義足や義手などを作つて無償で提供。現地義肢装具士も育成した。義肢製作の資金は、日本での講演やイベントなどで寄付を呼び掛けて集めたほか、義肢製作所の隣にレストランやゲストハウスを建てて収入を得ていた。

大雨で浸水し立ち退き

それが一変したのが昨年のクリスマスだ。その日、真美さんはガテラさんから初めて花束をもらった。以前、「花をもらったことがない」と言っていた真美さんの言葉を覚えていた夫からのサプライズだった。だが、幸せな時間は長くは続かなかった。数時間後には大雨で川があふれ、義肢製作所が浸水。赤いバラの花束も泥水に浸かって、枯れてしまった。義肢製作のための機材の被害はそれほどではなかったが、活動の資金源となっていたレストランやゲストハウスが壊滅状態になった。

年が明け、今年1月末にルワンダ政府から突然立ち退きを命じられた。この土地に水害の危





険があることが理由だという。政府が用意した代替地は街から離れた山の頂上で、足の悪い人たちが来られないため、義肢製作所にはふさわしくない。「もう少し時間が欲しい」と政府側と交渉したが、その翌日にはシヨベルカーがやってきて建物を強制的に壊していった。真美さんたちは義肢製作に必要な機材を運び出すので精いっぱいだった。

現在のワンラブは自宅として借りた一軒家にあつた物置を改装した仮設の作業所で細々と義足づくりを続けながら、ガテラさんが親戚から譲ってもらった別の土地に新たな義肢製作所を建てている。少しでも建設費用を安くあげるため、セメントを買ってきて自分たちでブロックも作る。

真美さんは資金を集めるため

に3月1日、日本に一時帰国した。講演会やイベントを100件近く予定していたものの、新型コロナウイルスの影響でほとんどが中止になった。大勢の人が経済的に打撃を受ける中、自分たちの活動を支援してほしいと呼びかけるのはばかられ、活動は追い込まれている。

苦難に落ち込む暇ない

短期間に次々と苦難に見舞われながらも、真美さんは気を落とすことはなかったという。

「建物が壊されているときだつて、どこに荷物を運び出そうかとトラックを何台借りようかと考えて、落ち込んでいる暇なんてなかった。この23年の経験で打たれ強くなっていたんだなって気づきました」

真美さんにとって、すべての基本がガテラさんだという。



ガテラさん（右）と真美さん（左）が、義肢製作所を開設した。2月1日、義肢製作所が完成した。

「出会った頃は単純に好きという感情で、彼のために義肢器具士の勉強をしたと思ったけど、死と隣り合わせの状態を生き抜いてきた彼には、どんなしんどいことがあっても簡単に諦めるという選択肢がなく、不可能を可能にしてくれた。いい意味で私を甘えさせてくれないんです」

そんな2人が見つめているのが、来年開催予定の東京パラリンピックだ。

実は2人は2000年のシドニー・パラリンピックで、ルワンダからの初出場の道を切り開くために尽力した経験がある。

ルワンダに義肢製作所を開設してしばらく経った頃、義足がほしいとやって来た20歳の青年

が、義足の完成を目前に自ら命を絶った。真美さんとガテラさんは、障害があっても前向きな気持ちを持つにはどうしたらいいのかと話し合う中で、スポーツで勇気づけられないかと思いつき、国際パラリンピック委員会に手紙を書いて援助を頼んだ。するとシドニー大会に特別枠として出場しないかと提案を受け、国内で選考会を開催。ワンラブで義足を作った27歳の男性が、ルワンダからの初めての代表選手として水泳で出場を果たしたのだ。参加のための資金も自分たちで集めた。

「思い返すと、とても感動した体験だけど、同時に感じたのは、パラリンピックはお金持ちの大会だということ。競技用車いすや走るための義足がないと勝てないし、航空券も買わなければ参加できない。そのお金が出せない国は出られないんです」

東京パラ出場も目指す

パラリンピックは近年、競技性が前面に押し出されるようになり、最新の技術を駆使した車いすや義足などを使用できる先進国の選手と、出場権を得るための国際大会への出場もままならない途上国の選手との間の格差が拡大しつつある。

「今は、パラリンピック出場や記録を出すことより、ルワンダ



ルワンダで陸上競技をする真美さん（左）とガテラさん（右）が、義肢製作所を開設した。

で障害のある人たちに、運動もできるんだという意識を持つてもらおう機会をつくりたい」

ガテラさんは「レーサー」と呼ばれる陸上競技用の車いすを手に入れ、ルワンダでトレーニングに励んでいる。東京パラリンピック出場も目指してはいるが、それ以上に、このかっこいい車いすをルワンダの人たちに見てもらいたいという思いがある。次は、通称「板バネ」と呼ばれるスポーツ用義足で走る選手を誕生させるプロジェクトも計画している。

「障害のある人もない人も誰もが参加できる日本の運動会のようなものを、いつかやりたいですね」

編集部 深澤友紀